

## 13 よくある観光客からの質問

### (1) 純粋のアイヌの人っているの？

現生人類はアフリカ大陸から世界各地に拡散したと考えられます。その意味で、地球上に、他と共通のルーツや接点を持たない人間集団はいません。どの人間集団も、移住、接触、混淆を繰り返して現在に至っていますので、巨視的にみれば互いによく似ているところがたくさんあります。それにも関わらず「あの人たち」と「私たち」という意識が生じるのは、地理的な距離や交流の多寡、言葉・文化のギャップなど様々な要因によります。

和人を例にとれば、歴史的に複数の人間集団が融合し、本州や四国、九州各地で多様な外貌や言葉、習慣を持つ人々から構成されています。つまり、純粋でもなければ言葉や文化の共通性が高いわけでもありませんが、それにも関わらず「日本」という一つの意識を持っています。

このことからわかるように「民族意識」は血統的な純粋さによって生じているわけではありません。現在の和人の多くが、自らを均質で純粋な（他と混じっていない）民族だとする感覚は、近代国家を作る過程で創出されたごく新しいものです（よく聞かれるアイヌ民族に関する単語 単一民族国家 106 頁を参照）。

和人やそのほかの民族との結婚は珍しくありませんが、その次の世代がどういったアイデンティティを持つかということは一概に語れるものではありません。メディアには、外見上はアフリカ系、ヨーロッパ系の要素を持ちながらも、自らを和人と規定する人々がたくさん活躍しています。同じように、両親のどちらかに似ていても、それはそれとして自身をアイヌ民族だと感じる人もいます。自分のとらえ方は、一生を通じて変化しうるものですし、マジョリティであれば常に意識しているものでもありません。これに対し、マイノリティは「あなたは何者か」という捉えにくい問いを向けられ、一つの明確な答えを決めなければならないというプレッシャーを感じることもしばしばです。

注意が必要なのは「純粋さ」を問う心理の背後に、混血や生活の変化とアイデンティティの減退を結びつける心理が働いていることです。自分をどう規定するか、ということは極めて個人的で、他に向かって公開することでもありません。しかし、人によっては周囲からのプレッシャーを受け、葛藤や自問をしながら自分の感覚に近い答えを出そうとします。その答えは、人の数だけあると言ってい

いでしょう。ところが「純粋か」「アイヌ民族らしさを持っているか」という問いは、そうした細かな感覚や思索とは対極のところであり、いわば「100か0か」という選択を迫るものです。そして暗に「純粋でないならアイヌ民族ではない」とアイデンティティを外から規定する暴論につながる可能性を持っています。このような問いを発することができるマジョリティの特権性に気づかせるような解説をすることが大切です。

## (2) 沖縄の人に似ていますね。

似た風貌ではありますが、言語や文化などは大きく違います。ただ、本州の和人を介して南北の産物は古くから行き交ってきました。神話の中にも、台湾や中国、朝鮮半島、本州などに広く共通するものがあり、その意味では大きくアジアの文化圏の中に位置づけられると見ることもできます。たとえば、しばしば話題になる女性の入れ墨なども、アイヌ民族と沖縄がピンポイントで共通しているのではなく、太平洋からシベリアにかけて広く見られる入れ墨文化の一部にアイヌ民族・沖縄が位置しているのです。

なお、歴史的には近世から和人の軍事的・経済的な圧迫を受け、近代以降は日本に統合されたことなど、多くの共通点を持っています。今日でも自律性・主体性を奪われ日本国の枠に包摂される一方、和人中心主義による圧迫を受け、対等に扱われないなど共通の経験をしています。個人レベルでの交流によって、こうした歴史や経験を共有し、協力して社会の改善に取り組もうとする人々もいます。

## (3) 昔から住んでいたの？

約3万年ほど前に、北方から移り住んできた人々が、今日のアイヌ民族のルーツだと言われています（アイヌ民族の歴史10頁を参照）。

## (4) 一般の日本人に比べてアイヌの人々の暮らしに違いはありますか？

アイヌ民族も和人も、巨視的に見ればアジアの共通文化を共有しているところがあります。また、たとえばサケの利用という点では、和人の中でもサケが遡上する東日本の文化と、アイヌ民族を含めた北方の文化とが共通点を強く持っているとも見ることができます。

明治以降は、日本国に取り込まれたことで同じ歴史を歩んできました。とくに、特に高度経済成長以後はメディアの発達により、本州以南でも言葉や習慣の均質

化が進みました。本州に移り住むアイヌ民族も増え、現在の生活－衣食住、社会のしくみや教育、仕事、遊び－は、日本に住む大多数の人々とあまり変わるところはありません。

しかし、経済や教育の状況でいえば道民一般との間には格差が見られ、北海道庁が実施した調査によれば生活保護率は平均の2倍という結果が出ています。高校・大学の進学率も着実に上昇はしているものの依然格差は残っています。

なお「一般の日本人」や「普通の日本人」という表現は、和人固有の文化や政治的立場を見えにくくするため、使用すべきではありません。

和人の多くが、自らの言葉や感覚を「普通」「標準」だと考えるのは、自身がその中で過ごしているからということに過ぎず、別な立場から見れば特色豊かな固有の言語・文化・感覚に感じられます（ときに大きなギャップさえ感じます）。問題は、そうした差異が見過ごされ「これは普通だから」と、強制力を持って標準化されてしまうことです。こうした和人中心的な感覚は、他の文化・価値観があることへの想像力を削ぎ、ほかの選択肢が無い社会を作ってしまうことで、結果的に多様な価値観を否定してしまうこととなります。

そういう点では、差別や排外主義と同じ結果に向かう方向性を持っています。しかもその力が実感されにくいために、通常の差別に比べ問題として取り上げることや、抗議がしにくいということが言えます。

これは、男性中心的な価値観や社会構造が、間接的に女性の立場や価値観を否定しながらも、その問題性に気づきにくい、という状況とよく似ています。

### (5)今でもアイヌ語を話しているの？

近代以降の日本の政策により、アイヌ語の地位は著しく貶められました。今日では、会話の中にアイヌ語の単語が出てくることは良くありますが、日常会話の主要な言語としてアイヌ語が話されることは殆どありません。一方、近年ではアイヌ語を活性化する様々な取り組みが始まっています（言語について アイヌ語 77 頁を参照）。

### (6)アイヌの人々は手先が器用ですね。（職業が木彫りだと思っている）

伝統的な技術が生活の中で伝えられています。工芸などに従事するアイヌ民族は全体のわずかであり、大多数のアイヌ民族は他の人と変わらぬ生活をしています。

なお、報道などでも「LGBTは創作面の才能が豊かだ」という発言をしばしば見かけます。ある人の出自や属性と能力や気質を直接に結びつけることは、個々人の特性の違いや努力を無化することにつながる場合があります、善意からの言葉でも思いがけない伝わり方をすることがあります。相手を過剰にほめそやすことは聖化という差別の一種であり、また社会における特定の役割を相手に期待し押し付けることとなります。

「関西人は全員あかるくて面白い」とか「青森県民はみんなリンゴを作るのが上手」とか「女性は繊細で子供が好き」という例を考えれば、こうした物言いが、偏見にもとづくお仕着せであることが実感しやすいでしょう。

### (7)入れ墨は何故するのですか？今は見かけないけれどどうして？

太平洋や、アジアからシベリアにかけての古層文化には、入れ墨が一般的に見られます。本州でもかつては男女とも盛んに入れ墨をしていたと考えられていますが、やがて衰退し、近世に社会の下層民に再び流行しました。このため、日本社会では「入れ墨＝反社会勢力」というイメージがあります。このことと関連し、アイヌ民族の入れ墨にも様々な理由づけがされ（説明が求められ）ていますが、元々は「美しいから」という理由がもっとも重要だったと考えられています。

なお、アイヌ文化内部では、入れ墨は文化神の妹がしていたものを真似たという由来が語られ、社会のメインストリームに属する慣習です。

また、猟運の向上などを願って、男性が入れ墨をした例も報告されています。明治になると、政府からたびたび禁止令が出されました。それでもすぐには無くなりませんでした。今日では元々の意味あいに入れ墨をしている人はいないと言ってよいでしょう。これに代わって、伝統的価値観復興の動きとあいまり、ペイントなど代替の手法で入れ墨を楽しむ人が増え始めています。

### (8)アイヌの子供と日本人の子供は同じ学校に入っているの？

1901（明治34）年の「旧土人児童教育規定」によってアイヌ児童と和人児童との別学が定められた時期もありましたが、現在は、同じ学校に通っています。

日本の学校教育は基本的に和人児童を想定して組み立てられており、多民族・多文化状況に対応するためには、教員養成や教材作成の見直しが必要でしょう。

### (9)何を食べているのか？

現在の生活—衣食住は日本に住む大多数の人々とあまり変わることはありません。(人々の暮らし 食べる 19 頁を参照。)

### (10)結婚はどのようなものか？

男女とも一定の生活能力を有し、精神的にも肉体的にも成熟した、いわゆる成人と認められてはじめて結婚をすることができたといえます。男性であれば、猟漁によって食糧をあつめ、祈りや祭具の制作など儀礼を通して《カムイ》(神)との良い関係を保つ力量を身に着け、女性であれば衣食に関わる技量を身に着け、初潮をむかえる頃から施す入れ墨が完成することなどが成人の証であったといえます。

結婚は、恋愛婚や許婚婚など様々です。物語や言い伝えなどによれば、女性が男性の家に嫁入りすることが多かったようですが、子が女性だけの家の場合には男性が女性の家に婿入りするケースもあったといえます。血縁の近い結婚はタブーとされていたことから、女性は《ラウンクッ》や《ウアソロクッ》と呼ばれる肌に直接まく帯の形態によって母系のルーツを表し、男性は《イナウ》(木幣)につける《イトクパ》と呼ばれる刻み文様によって父系のルーツがわかるようにしていました。

### (11)どんな家に住んでいるの？

現在の生活—衣食住は日本に住む大多数の人々とあまり変わることはありません。(人々の暮らし 住む 65 頁を参照。)

### (12)伝統文化はどのように伝承しているのですか？

各地で個人、団体による文化伝承保存活動が活発に行われています。明治以降の同化政策によって消えつつあった風習等が、こういった活動を通じて各地で伝承されています。また、アイヌ民族が主体となった研究活動も徐々に広がり、新しい形での教育、普及がはじまりつつあります。